

子どものユーモアに関する研究（その2）

奥 田 倫 子

は じ め に

ユーモアとは何であるかについて、様々な見解があるが、筆者は前回ユーモアに関する語を調べ考察していく中で、ユーモアを「おかしさ」「おかしさを楽しむ心」と仮説をたて研究を進めていくことにした¹。今回はこの仮説を基に、子どものユーモアについて具体的に捉えていくために、これまで留めてきた幼稚園での観察記録の中でユーモアに関連したものを整理、分析することにした。観察記録は保育科1年の学生によるものと、筆者によるものを取り上げてみたい。

筆者はこれまで、保育について学び始めた保育科1年の学生が、どのような子どものユーモアに気づき、またそれに対してどのような感想を抱いているのかについて興味を持ち続けてきた。学生らの新鮮でとらわれのない感覚が、ユーモアを新たな方向から眺め、見つめ直す役割をしてくれるのではと期待しているからである。今回はまず始めに、参観生の捉えたユーモアを紹介し、その中から子どものユーモアとは何かについて考えてみたい。

また前回では、子どものユーモアがいったいつ頃から芽生えてくるのか、あるいはその原因や意味について、詳しくは検討できなかった。子どものユーモアの芽生えを捉えようとする時、子どもの年齢が下がれば下がる程、子どもがどの程度ユーモアを解し、生み出しているのかを調べるのは難しいが、一般に微笑みや笑いを媒介として探ることができる。微笑みや笑いは、乳児期を中心に目まぐるしい成長を遂げ、その性質や意味が変わっていく。微笑みや笑いの発達を手掛かりにしながら子どものユーモアの芽生えを考察することにし、さらに子どものユーモアの原因や意味を検討し、その際、これまで筆者が観察の対象としてきた3～5歳児のユーモアについて、観察記録を取り混ぜながら考察することにする。

I 子どものユーモアとは —参観生の記録を通して—

本学保育科1年の学生は、年間を通して隔週ごとに幼稚園参観を行い、その都度レポートを提出している。1988年4月から10月までのレポートの記述の中から、ユーモアと関連しているように思われるもので、学生の何らかの考察が加わっているものを抜き出し、それぞれについて分析してみたい。

〔3歳児の記録〕

1) H男はラダーの上に座り、“入ってください”と言い、足をぶらぶさせている。“どー

ん、どーん”と言っては、ラダーの下に敷いてあるマットの上に座っているM男の頭を蹴る。ふざけているにしては、少しやりすぎだと思う。

2) 粘土遊びをしているA男は、“指一本でちゃった”と言って、先生に見せる。指を出すために、粘土を指先でむしる。“うわー”と言う。隠れていたものがひょっこりでてくると、自分でやっているにもかかわらず、楽しいようである。この年頃になっても楽しいものだから、赤ちゃんが「いないいないばあ」をして喜ぶのがよくわかった。

3) B男は前回の3歳児の参観の時に、印象に残った明るい子です。外見も内面も。でも私が見ている時は、生活のごく一部だから断定はできませんね。まあ鼻にストローを入れたりして友達を喜ばせ、笑わせたりする、三枚目の子でした。ああいう子は人気があるんですね。

〔4歳児の記録〕

4) ローラーで色塗りをしている子どもたちが、この組では一番楽しそうでした。何か道具を使って色を塗ることも面白いでしょうが、その型を破って素手で塗る方が、子どもにとってはとても楽しいんだと思います。みんな、目が生き生きしていて、ニコニコしていて……。自然のままだが一番いいですね。手で塗ったら怒られるんじゃないかというスリル感も、少しはあったんじゃないかと思います。友達同士、目で合図してヒヒヒと笑っているんですから……。やはり大人があまりやって欲しくないというような遊びは子どもは大好きなんだなあと思いました。大人が嫌がると、なおやりたくなってしまうのが子ども心だなあと思いました。

5) A男は、友達の粘土を切る真似をして怒られる。ただちょっとふざけたつもりだったのだろう。怒られて悲しそうだった。

6) にこにこしながらA男は友達と“ばかー、あほー”と言っている。ばかやあほの意味がよくわかっていないらしい。

7) C君とY君は、積み上げた積み木を倒している。その時の“ドーン”という音を聞いて、とても喜んでいる。この時の子どもの心境はどういうものなのだろうか。ある程度成長した子どもなら、大きな音は自分からあまりたてないが、4歳児、5歳児の子どもは大きな音を自分からたてる。不思議です。

8) 先生がただ“ごぎを片付けてください”と言うよりも、“のりまき巻いて下さい”と言った方が、子どもも楽しく片付けられるだろう。

〔5歳児の記録〕

9) T男はずるい。K男は“いっせいのーで”でちゃんと飛ばしたのに、T男は飛ばさなかったのだ。K男が2回目に飛行機を飛ばさない気持ちがよくわかる。T男はK男をからかったのだ。子どもでもからかうし、冗談を言う。参観が始まる前の私は、子どもは大人と違うんだ、大人はいろいろ考えるが、子供はそんなことないと感覚的にそう考えていた。けれども子どもは大人以上に考え悩む。子どもの神経はとても敏感なのだ。それをあまり深く傷つけないように、先生は配慮しなくてはならないだろう。

10) T男は、細長い積み木をつなげようとしてネジを探すが、新しいのがなかったので古い

ものを探そうとする。その時“どこでしょう”の替え歌で“古いやつ、古いやつ、どこでしょう。ありました、ありました、ありました。”と歌って見つける。ただ歌を歌って楽しむのではなく、こんな替え歌を自分で作り、物を探すこと自体を楽しんでいるのに感心してしまう。

11) 先生は“竹の子さんって何枚お洋服着てると思う？”と尋ねる。竹の子の皮をお洋服に例えるなんて、本当にユーモアで皮をむくのも楽しくなりそう。

12) A子は紙を一回折って三角にする。そして“先生できたよー”と言うと、Y男は“先生できないよ”と言う返事をしながら折り紙をする。これがこの子の面白い特徴で、わざと反対のことを言って楽しんでいる。ちょっとした時に、自分で園生活を楽しんでいると思うので、きっと幼稚園が大好きじゃないのかな。

13) 保育室で飼育している「あげはちょう」についての話しあいにて

先生：そしてうんちしたのを取り替える時、触ったらどうなった？

みんな：オレンジ色の角を出した！

先生：そう。オレンジ色のものをだしたね。そして臭かったわね。

A男：仮面ライダーみたかった。

先生：なんで出したのかな？

B男：頭からおならしたんじゃない？

自分の感じとった感覚でユニークなことを言うB男。またまた鋭いユーモアが生まれた。頭からおならなんてよく思いついたものだと思心してしまう。と同時に笑ってしまった。ワッハハ……子どもは本当にユーモアのセンスに満ち溢れている。

14) かたつむりを見ていたA君は“きたねえー俺の手にうんこまでついとる。”と大声で叫ぶ。そして手を洗いにいく。幼児は「うんこ」とか大人が嫌がる言葉が好きなんだ。でもこれは反対に、大人が嫌がるのが面白いから好きなのではないか。

1) や5) に記されているような子どもの「ふざけ」は、頻繁に見受けられるものであるが、ふざけているつもりが相手を傷つけてしまったという点で似通っている。1) では足をぶらぶらさせている行為が、いつの間にか友達のをどーんどーんと蹴る行為に変わったこと、5) では友達の粘土を切る真似をしていたのが、実際切ってしまったことを示しており、後者は架空の世界と現実の世界の境界線を越えてしまった行為と考えられそうである。参観生は子どものふざけを、1) においてはいささか批判的な見方、5) においてはただふざけていただけたのにといった同情的な見方をしているようである。

2) は隠れていたものが現れる面白さを描いているが、これは参観生がみているように、「いないいないばあ」の「消失と出現」²⁾の面白さの原理に基づいているのではないかと考えられる。参観生は、幼児が自分でやっているにもかかわらず、出現を楽しんでいる点を衝いており、赤ん坊よりも年齢が上の子どもに楽しまれているなら、赤ん坊が喜ぶのも当然だと納得しているのである。

3)、10)、12) は、共にユーモアの感覚をもつ子どもに見られる特徴を示している。そのような子を、3) では自分を笑うことができる子、そして回りに人気のある子と見ており、10) や12) では、自ら生活を楽しくしようと前向きな態度を持っている子と見ているようである。さらに述べると10) では替え歌、12) では「できる」「できない」という正反対の概念をもて遊んでいるのであり、共に言葉あそびに属するものである。

7) は驚きによって生まれるおもしろさ、同時に解放感をも示しているような事例である。参観生がこのような行為は、ある程度成長した子どもには見られないと述べていることと、Klein³が幼児期に楽しめるユーモアの最も重要な要素として、おどろき (surprise) を掲げていることと、何らかのつながりがあるように思われる。

8) や11) は共に教師の発想の転換によって生み出されたユーモアのようなものである。8) では「ごご」を「のりまき」に見立てることによって、片付けに楽しさを添えてくれるのではないかと考え、11) では「竹の子の皮」を「竹の子のお洋服」に見立てることによって、活動の楽しさを倍加しているのではないかと考えているようである。殊に11) では、そのような教師の見立てをユーモアとして捉えている。

9) では、子どものからかいの行為を拾いあげ、参観生はからかわれた側の気持ちにたって「K男が2回目に飛行機を飛ばさない気持ちがよくわかる」と述べている。さらに子どもでもからかいや冗談を言うんだと述べながら、参観を通して子ども観が変わりつつあることを言い表している。

14) では記述の中に「うんこ」という言葉がでてくるが、これはコーエン&ルドルフによると、聞いている人を驚かせたり、ショックを与えたりすることによって、仲間と一緒におもしろがるものであると説明されている⁴。参観生も、幼児は「大人が嫌がる言葉が好きなんだ」「大人が嫌がるのが面白いから好きなのではないか」と推測しており、相手が驚くことや嫌がることを期待し、それをおもしろがると述べている。これと多少性質が異なるが、4) や6) も大人に禁止されていることを、却っておもしろがって行うという点で似通っている。4) では大人に禁止されていることを実行するおもしろさ、スリル感を参観生は記している。6) では参観生はこの子どもらが「ばか」や「あほ」の意味を理解していないのではないかと見ているが、これらは一般的に人を傷つける言葉として知られており、大人に禁止されている言葉であると考えられる。ゆえにわざとおもしろがって使用しているとも推論できる。

13) は子どもがそのまま捉えた感覚が、参観生にとってユニークでおもしろく映った例であり、稲田の「わたしのマザーグースー幼児のことばの実際ー」の中での「言いたいことが胸にあってもちょうど適切な表現を知らない時、こどもはことばを創りだす。それが通用している語か否かについては関心がない。通用すると信じているふしがある。この作業はたいへん創造的である」⁵との指摘がぴったりあてはまるように思われる。またこのような子どものユーモアは、飾り気のない素直でストレートな表現であるがゆえに、吉岡たすくの長い教師生活で得られた経験より語られた「子どもたちは自然のユーモアを持っています」⁶との見解に共通する

ものがある。

以上、参観生の捉えたユーモアを紹介し、それぞれについて分析を行ってみた。このことを通して、気付いたことを2、3述べてみたい。

まず第1に、ユーモアとは見慣れた世界を、自らの発想を切り換えることによって、より楽しく生きようとする態度であるように思われる。事例の中で先生や子どものユーモアを通して見られたように、片付けや物探しなどどちらかといえば面倒で退屈になりがちな活動にユーモアを添えることによって、楽しさを見出すことができる創意工夫である。

第2に、ユーモアとは逆転への渴望から生じるものであると考えられる。大人の禁止することを子どもがおもしろがって行うことも、また反対概念を楽しむのも、期待されていることや真実が何であるかを知っているがゆえに、それを確かめるために逆を行いたい、あるいは楽しみたいという心理が働いているように思われる。

第3に、子どものユーモアの特徴を考えるならば、子どものユーモアは子どもが物事をありのまま見つめた結果生まれた「自然のユーモア」であるように思われる。大人のように、意図的に生み出そうとするよりも、子どものもつ陽気さ、無邪気さが、ユーモアを生み出しやすい状態を導いているのではないだろうか。また物事のおもしろさを発見した時、ストレートに応じるからではないだろうか。

II ユーモアの芽生え

ここでは微笑と笑いの発達について取り上げ、また乳幼児の初期の段階において、微笑と笑いを生み出す遊びの中で代表的なもの「いないいないばあ」について分析し、これらを通してユーモアの芽生えを考えてみたい。

A 微笑の発達

乳児の微笑は、生後1年の間に著しく発達していく。生後間もない乳児には、「内因性の微笑」⁷が見られ、これは外的刺激と関わりをもたない自発的筋肉運動で、「生理的微笑」⁸とも呼ばれている。ウルフ（Wolff）らの観察によれば、外からの刺激によって微笑が誘発されるのは、生後1週間たった後のことであり、ベルやガラガラなどの金属的な音に対して微笑が生じるようになるという、生後2週目頃には、人間の声に対してより微笑が誘発されるようになるという⁹。

聴覚刺激によって誘発されていた微笑は、次第に視覚刺激によって誘発されるようになり、生後5週ごろから、人の顔に対する微笑が確立するようになる。吉田¹⁰は、この現象を認知論的立場から、人の顔に対する図式が形成されたばかりの時期であるがゆえに、人の顔を同化する努力を必要とするために微笑が生じるのであると述べ、ピアジェはこの微笑を、「再認の微笑」¹¹呼んでいる。一般にこの段階での微笑は、人の声や人の顔により、安定したしかも多量の微笑を生じることから、「社会的微笑」¹²と呼ばれている。そしてこのような微笑は、まわりの人

を強く乳児に引きつけ、初期のコミュニケーションのやりとりが始まるのだと言われている¹³。

人の顔に対して一貫して微笑を示していたのが、一旦見知らぬ人と見慣れた人とを区別できるようになると、見知らぬ人に対する微笑が減少する。この微笑は、生後5、6カ月頃から生じる「選択的微笑」¹⁴あるいは生後7、8カ月頃から生じる「識別的微笑」¹⁵と呼ばれており、この時期はいわゆる人見知りが生じることで知られている。人見知りは、見知らぬ人に対し、泣く、ぐずるなどの拒否的な行動を起こすものであるが、同時に特定の対象との間に、特に母親との間に愛着関係が成立し始めたことを意味しており、大体生後8カ月頃から2歳近くまで見られるという¹⁶。

以上微笑がどのように発達していくのかについて、一般的な見解を述べてみた。生後間もない頃には、外刺激に関わらず自発的に生じるが、次第に外側の聴、視刺激によって生じるようになり、乳児期後半になると、見慣れたものに対して選択的に生じるようになることが分かった。

以上述べたことは、乳児の微笑の原因が、快の情緒の表出や人とのコミュニケーションの手段であることを示すものであるが、それ以外に、外界の情報を解読し得た時の理解の楽しさ¹⁷や、自分が期待しているものと実際知覚しているものとの間に何かコントラストがある時に引き出されるおもしろさ¹⁸も示されている。

B 笑いの発達

笑いの発達を述べる前に、笑いとう微笑の違いにふれてみよう。友定¹⁹は、笑いを笑い声を伴うもの (laughter) と伴わないもの (smile) とに区別している。織田²⁰においても同様、微笑を笑いの中でもっとも量の少ないものとし、哄笑や爆笑と区別している。笑いとう微笑の性質の差に着目すると、笑いは激しく微笑は穏やかであるとする見方²¹や、笑いを攻撃 (aggression) の要素をもつものとして、微笑を好意 (friendliness)、懇願 (entreaty)、緩和 (appeasement) の要素をもつとする見方²²、そして微笑よりも活気のある刺激を必要とするものとして笑いを捉える見方²³などがある。

では笑いは、いったいいつ頃から生じるのであろうか。一般に、笑いは生後3、4カ月目に発生するといわれている²⁴。Sroufe & Wunsch²⁵は150人以上の乳児を対象に、生後1年間に、笑いの量と笑いを引き出す刺激の性質との関係が、どのように変動していくかを分析した。この中では、生後5カ月の乳児は、揺り動かされたり、頬をくすぐられたり、母親が顔を覆った時に、生後7、8カ月の乳児は、母親が髪を振り動かしたり、口を布で覆ったり、動物の音をたてた時に笑うことが示されている。さらに生後1年目に近づくと、母親がペンギンのように歩いたり、舌を突き出したり、赤ん坊の哺乳瓶を吸っているのを見て、声高に笑うと述べ、この時期には不一致を解釈しようとする知的努力が笑いを起こすと言っている。そして生み出された刺激を笑うだけではなく、母親の口の中に布を詰め込むような、笑わせるような刺激を自

ら生み出すことが述べられている。このように、笑いは生後3、4カ月頃から発生し、始めは刺激によって直接的に生じたのが、次第に刺激を解釈、予測、生み出すことによって生じるようになるのである。このことはユーモアの証拠として解釈できるように思われるが、McGhee²⁶はこの実験結果については懐疑的であり、笑いが生まれたのは覚醒の変化によるためであり、乳児の認知発達の間では不一致をまだ知覚できないと見ている。そして不一致を知覚できるのは、イメージをもて遊び、見立てを始める生後2年目頃であることを主張している。また友定²⁷の記録においても、2歳児において、対象の中の何らかのずれを見出すおかしきの笑いが、始めて生まれることが示されている。

C いないいないばあ

やまだ²⁸の観察記録によれば、生後3カ月ごろの乳児は、人の顔を見ても自分から視線をそらすという行動を頻繁に行うようになり、「見える－見えない」変化を作り出すようになるという。「見える－見えない」で称される視覚的变化は、次第に乳児の微笑や笑いを引き起こすようになり、いないいないばあの発生として考えられるという。いないいないばあの初期の段階では、回りの大人が顔を隠したり現したりすることが多いが、だんだん乳幼児自ら主導権をとって、顔を隠したり現したりするようになることが言われている²⁹。

やまだ³⁰はいないないばあを「ものの消失と出現のくりかえし」を楽しむゲームとして捉え、このゲームを楽しむためには、消失したものはそれが一時的に見えなくなっただけで、実際は存在しているのだということ、また出現した時には、前に見たものと同じであるということが認識されている必要があるという。それゆえ、消失と出現を知覚できるようになった乳幼児の段階で、このゲームは楽しめるのである。

寺内³¹は、いないいないばあを緊張と解放のメカニズムに基づいた遊びであると説明し、「いないいない」で子どもは不安を覚え緊張が高まり、「ばあ」で隠れた顔と同じ顔が再び現れ、安心し解放感を味わい、笑いが生じると述べている。この緊張と解放は、特に乳幼児期に起こる、親との分離不安に対処するものと考えられている。ローゼンブルース³²は、乳児がいないいないばあのゲームを演じることによって、母親が去っていくことに対する恐怖心を和らげるのではないかと見ているのである。

では今まで述べてきた笑い、微笑、いないいないばあの3つの観点を基に、ユーモアの芽生えを考えてみたい。ユーモアの定義の仮説である「おかしさ」を取り上げて考えてみる時、上記の内おかしさが見出されるのは、不一致を知覚する時であるように思われる。しかし、乳児が不一致を知覚しているかどうかについては、これまで述べた中でも様々な論争があり、はっきりしていないように思われる。それらを基に考えるならば、乳児は不一致を知覚していると、笑いや微笑みを説明するガーヴェイや Srofe & Wunsch の立場においては、ユーモアの芽生えは乳児期後半頃であり、知覚していないとする McGhee や友定の立場においては、生後2年目頃であるように思われる。

III 子どものユーモア —その原因と意味—

筆者は1987年9月より11月まで、幼稚園内において3—5歳児を観察し、ユーモアと関わりのあるように思われる行動を自然観察法により記録した。記録採集したものについて、子どもがおかしさを生み出しているもの、またはおかしいと感じているものを抜粋し、言葉によるものと行動によるものの2つの観点から分析してみたい。

A 言葉によるユーモア

言葉によるユーモアを1. 言葉の不一致やナンセンスによるもの、2. 言葉のリズムや音によるもの、3. 排泄や性に関する言葉、4. 言葉によるからかい、に分けて整理分析してみたい。

1. 言葉の不一致やナンセンスによるもの

対象についてのイメージが形成されるようになると、子どもはそれが真実であることを確認するために、架空を導くことが述べられている³³。この架空とは、概念や対象の不一致、逆転などで代表されるものである。不一致のユーモアとしてよく引用されているのは、チュコフスキー³⁴の生後23カ月の娘の冗談第一号のエピソードである。「パパ、ワンワンがニャーンって!」とで示された、動物とその鳴き声との不一致のゲームは、彼女が初めて悟った冗談の仕組みであり、その後何度もそのゲームを繰り返したという。チュコフスキーによれば、このような言葉のきままなあやつりは、子どもが多く断片的知識を体系づけていかなければならない必要性から生まれるものであり³⁵、年齢が上がり、知識が体系づけられてくると、このような概念のもてあそびは減少してくるのである。

記録1 4歳児

男児Rが“紙はいりませんか? 紙はいりませんよ”といいながら紙を配り歩き回っている。

記録2 4歳児

女児Fが女児Mに“Mちゃん、スカートはこう。はこうってばあ”とままごとのスカートを一緒にはいてくれるように誘いかけている。女児Aはそれを遠くで聞き、“スカートはけないってばあ”とふざけたように言う。

記録1、2は「いる」「いない」や「はこう」「はけない」(「ぬごう」ではない)など、正反対の概念を示す言葉を作り出している事例である。

記録3 4歳児

女児Tは女児Hを見て、“I先生(実習生)おはようございます”“U先生(実習生)おはようございます”“M先生(園の先生)おはようございます”と笑いながら頭を下げて順番に言う。

McGhee³⁶は、就学前期では、よく知られた対象や活動に、間違った名前を付けたり、正しい名前を歪めることを、非常におもしろがると述べている。記録3は、Tが友達の名前の代わりに、先生の名前を順番にあてはめて、おもしろがっているのである。このような知っている人物を異なる名前と呼ぶことは、筆者の観察中頻繁に見受けられた。子どもたちの名前ではなく、

大人でかつ権威者としての存在である先生の名前を入れることが、よりおもしろくしているようである。

記録4 4歳児

男児数名が、砂場にて、木切れを用いて砂を平らにしている。男児Iはバケツに入っている泥水を見て、“コーヒー牛乳みたいね”と言う。また男児Tは木切れを使いながら、“アイロン、アイロン”と笑いながら歌っている。男児Aは“アイロン”と言いながら、泥水の入ったバケツの中に砂の入ったバケツをひっくり返して入れ、先生を呼ぶ。先生は“洋服、汚れるよ”と言う。それに対してAは泥水を指して“コーヒー牛乳”と言い、男児Fは“アイロン牛乳”と言い、回りの子どもたちはくすくす笑う。さらにAは“むかしむかしアイロン牛乳があったとき”と言う。

記録5 4歳児

クラス全員で「手にもつなめに」のゲームをしている。男児Aはゲームの歌詞の“あてたらえらい”の箇所を“あてたらだめだ”と歌い、他の男児たちも“あてたらコップなーんです”“あてたらうんちかーうんこかー”“あてたらうんこが出てくる”と口々に歌う。

記録6 5歳児

クラスで“ほら、なっている。お庭ですずむしがリリリリー”と輪唱した後、先生が台所へミルクを取りに行く。先生の不在の間、誰からともなく、“すずむし”の箇所に“せみ”“かえる”を入れて替え歌にする。先生が戻ってくると、男児Yが“先生！おもしろい歌、歌ってあげる……お庭でかえるがゲロゲロ”と替え歌を歌う。続いて回りの子も口々に、“すずむし”の箇所に“みんな”“〇〇くみ”“ケロケロ”“ちんちん”“輪唱”等当てはめ歌う。

記録4では、「コーヒー」の代わりに「アイロン」を当てはめることによって、「アイロン牛乳」というナンセンスな言葉が生み出され、回りの子どもたちは、そのようなものが存在しないことを知っているから、くすくす笑うのである。記録5、6は共に替え歌であり、記録5では「えらい」に対し、「だめだ」という反対の概念を表す言葉を使っていること、記録6ではすずむしの代わりに当てはめる言葉の殆どが固有名詞や普通名詞であることは、言葉の概念や文の構造を理解しつつあることを示しているのである。

記録7 4歳児

礼拝の場面。先生が“あるところに、おじいさんとおばあさんばかり住んでいるおうちがありました”と言うと、子どもたちはどっと笑う。さらに話の中で“うめばあさん”“はるばあさん”という名前がでてくると、また笑いが起こる。男児Fは横に座っている女児Nに“うめばあさん、うめさん”と呼び掛ける。

記録7は、子どもにとって、おじいさんやおばあさんばかり住んでいる家があるという矛盾、また“うめばあさん”や“はるばあさん”という聞き慣れない名前による矛盾がおかしさを生み出し、大笑いを導いたように思われる。

2. 言葉のリズムや音によるもの

ガーヴェイ³⁷によれば、一番始めの言葉遊びは生後6～10カ月の喃語の時期に、音を作り出す過程で行われると言われている。しかしこの時期では、音声を出すことと会話との違いがまだ明白ではなく、反復的でリズムミクな発声は、子どもの機嫌が良い状態の時に生まれるという。またその際、親や周りの大人の出す発音や舌ならしの音などは、子どもの最初の言葉遊びのモデルとなるようである。

チュコフスキー³⁸は、幼い子どもほど「韻」に執着する理由として、音声の器官が発達していないがゆえに、違った音響よりも似通った音響の方が、発音しやすいことを挙げている。片言の多くが二重構造になっており、ことばの後の部分は始めの部分の繰り返しであるのも、そのためなのである。

記録8 4歳児

砂場で男児Sは土を触りながら“うんちのうんちのうんちのう。プーププ、プーププ、プーププ、プ”とリズムカルに歌う。

記録9 5歳児

男児Aは空箱（ペンギンの絵がかいてあるオレンジの棒アイスの箱）を持ち、保育室を次のような歌を歌いながら歩き回っている。

アイスクリーム あれ ペンギンだった
ペンギン ペンギン
あれ アイスクリームだった
アイスクリーム アイスクリーム
あれ オレンジだった
オレンジだった オレンジだった

記録8は、「うんち」と「プー」とが規則正しく、リズムカルに配置され、記録9では「アイスクリーム」「ペンギン」「オレンジ」が代わる代わる現れては消え、リズムカルに歌いあげられている。その他、正常な発声の音を歪めることも、おかしさを生み出すようである。

記録10 3歳児

男児AとSは、観察者のところに来て、笑いを浮かべながら、わざと低い声で、“おはようございます”とあいさつする。

3. 排泄や性に関する言葉

記録11 3歳児

片付けの時、女児Rが観察者に話しかけてくる。“おもしろいよ。トイレでうんこもしたよ。しっこもしたよ”。

どうしてトイレにまつわる言葉は、子どもたちにとってこんなにおもしろがられるのであろうか。

それに関しては、聞いている人にショックを与えることをおもしろがるため、排泄に対する不安感を解消するためという2点の理由が述べられている。コーエン&ルドルフ³⁹は、子どもたちはそのような言葉が聞いている人にショックを与えることを知っており、その反応をおもしろがって用いると説明している。多少異なった性質を持つものであろうが、ブラゼルトン⁴⁰は、子どもたちが「悪い言葉」を用いることを、大人に対しての言語的挑発行為であると説明し、周囲の大人をあわてさせることをおもしろがっていると述べている。また精神分析学的見地では、子どもは排泄をコントロールできた後にも、時々失敗することがあり、まだなんとなく不安感をもっていること、その不安感を解消させるために用いると捉えられている⁴¹。

記録12 5歳児

玉入れごっこの場面。女児Aがかごの中に入った玉を1、2個と数え、4個のところで“しこ”と言い、それを聞いた女児Kは“おしっこ？”と聞き返し、ワハハと笑う。

記録13 3歳児

女児HとOが先生と共に、ダンボール箱で作った動物にニスを塗っている。先生が“今度おしりして（おしりの部分にニスを塗ってみての意）”と言うと、Hは“おしり？”と笑いながら聞き返し、Oは歌うように、“しりしりしり”と言う。

これらは耳にした言葉が、排泄に関した言葉あるいは、それに近い音声の言葉であり、それをおもしろがっている事例である。子どもは排泄に関した言葉に非常に敏感であり、耳にするとそれを放っておくことはなく、笑ったり繰り返して口にするように思われる。

記録14 4歳児

砂場で男児Aは積み上げた砂山を指して、“先生、これうんちのくそやて”と笑いながら言う。先生はそれに対して、“きたない”と笑って受け答える。

子どもは始めから、排泄物を汚いものとして受け取っているのだろうか？本田は「子どもたちは幼ければ幼いほど、分泌物や排泄物に対して忌避感を抱くことはがない。むしろそれらに執着し、快げにそれらをもてあそぶものである」⁴²と述べている。またフレイバーグ⁴³によれば、子どもがトイレの訓練を始める発達段階においては、自分の排泄物について興味を持ち、全くきまり悪さを感じていないという。排泄を訓練され、自分でコントロールできるようになると、排泄行為や排泄物は「汚い」「恥ずかしい」ものとなるのである。友定⁴⁴は、排泄をコントロールできることは、子どもにとって自立の第一歩であり、いったんコントロールされて後は、排泄行為や排泄物は自分を低い次元に引き戻そうとする力を持つがゆえに、恥ずかしいものとなることを説明している。以上のことから、子どもは始めから排泄物を汚いものとみなしているのではなく、排泄のコントロールを境に、汚いあるいは恥ずかしいという意識が生まれることがわかる。

4. 言葉によるからかい

からかいとは本来なら、「冗談を言ったり困らせたりして、人をなぶる」⁴⁵の意であるが、幼児

奥 田 倫 子

期に見られるからかいは、どのようなものであろうか？

記録15 3歳児

女児Tが“きゃあ”と言いながら逃げ、女児Kが追い駆けている。Tは“ばかっ”と言い、ラダーのところへ逃げ込む。Tは先生と目が合ったので、先生のところへ駆け寄り“ばかうんちのせい”とKについて言う。その表現が気に入ったのか、何度も笑いながら繰り返す。そしてTは積み木が置いてある場所へ行き、“ばくばくばく”と言って積み木を食べる真似をする。さらに“ぱんぱんぱんぱん”と言い、積み木が入っている箱を、金づちに見立てた積み木でたたく。KもやってきてTの真似をしてたたいたので、TはKにむかって“ばかとんかち”“べんじょぼぼ”と言う。KはTに“あそこへ行こう”と言い、ままごとの部屋に行こうと誘いかける。それに対してTは“ばか、ばか、うんち”と言い、今度はTが逃げるKを追い駆ける。

記録16 4歳児

砂場で女児Oと男児Iが遊んでいるところに、男児Tがやってくる。Tにむかって、Oは“てっかめん”、Iは“てっかちゃん”と言ってからかう。Tが行ってしまい、しばらくした後、OはIが砂の上にすわっているのを見て、“また汚ねえーとこ、すわっている。なんやお前、汚ね、汚ね、お前、汚ね”と言うが、Iはそれを笑ってうけとめる。Oは再びIに向かって“なんやパンツ”と言うが、Iは笑って“パンツ？”と聞き返す。

記録15を見ると、“ばか”という相手を非難する言葉が、トイレに関しての言葉と結合したために、その組み合わせがかもしれないナンセンスさがおかしさを生み出し、からかいが深刻なものとなるのを妨げているように感じられる。記録16も同様に、からかいの言葉として“パンツ”が用いられているが、Iが笑って“パンツ？”と聞き返したことからわかるように、からかわれた相手も、多少はおかしさを享受しているようである。

これらの記録を、からかいとして受け取ってよいのかどうかについては問題があるが、一般に定義づけされているように、相手を痛めつけることを目的とするのではなく、この場合相手の反応をおもしろがる、あるいは共におもしろがることを目的としているようである。

B 行動によるユーモア

行動によるユーモアを1. おどけた恰好をすること、2. いたずら、3. 不一致を引き起こすこと、4. 排泄や性に関する行動、5. 行動によるからかい、の5つに分類して、考えてみたい。

1. おどけた恰好をすること

おどけとは、自分をおもしろおかしく見せることによって、人を笑わせることである。

記録1 4歳児

保育室にみんなが揃うのを座って待っている時、男児YとUとはペロペロバーと言いながら、お互いにおもしろい顔を見せ合う。

記録2 4歳児

ミルクを飲んでいる時、男児Eは笑いながら目を白目にして、横に座っている女児Mに顔を向け、Mはその顔を見て笑う。しばらくしてEはミルク瓶を前の机に返し、自分の椅子に戻る時、指で口を大きく横に開き、その顔を女児Sに見せる。その後Eは観察者を指差し、くすくすと笑う。

記録3 5歳児

手洗いから戻る子どもたちを待っている間、男児I、K、Rはおもしろい顔を互いに見せ合っている。また男児A、Sは、腕をつつきあったり、おもしろい顔を見せあったりする。そのうちSは体を傾けてAに寄り掛かる。

記録4 5歳児

いすに座って、みんなが保育室に入ってくるのを待っている時、男児Yは男児Tにおもしろい顔をしてみせる。TはYにその顔を真似し返す。

記録5 3歳児

椅子に座ってみんなが集まるのを待っている時、男児Nは、横に座っている男児Jの肩に手を置いて、一緒に倒れようとする。Jもおもしろがっている様子である。また横に並んで座っている男児SとNとは、向かい合わせに体の向きを変えて、にらめっこをするが、Sがつくる顔を次々と、Nが真似をするといった風のにらめっこである。

上記の記録に共通することは、おもしろい顔をして、友達に見せることである。おもしろい顔を見せられた側は、殆どの場合、おもしろい顔を返し返しているのであり、共におもしろさを分かちあっているようである。また記録4、5のように、相手のつくる顔を真似することも、子どもにとっておもしろいようである。また次の記録6で示されているように、子どもたちは意図的にあるいは無意図的に、多種多様な表情をつくりだす。

記録6 4歳児

先生に名前を呼ばれると、子どもたちは返事をし、椅子から立ち上がってクレヨンを先生のいる前のところまで取りに行く。男児Yは、顔をわざとしかめて取りに行く。それを見た男児Nは“がいこつの顔みたい”と言う。

記録7 3歳児

片付けの時、男児Sはおばけのように両手を前にぶらりと出して、歩いている。

記録8 5歳児

女児I、J、Tは肩を組んで“よっぱらい”と言いふらふら歩き、とうとう倒れる。Iは“またやるか”と言い、再び繰り返す。そこへ男児Mがキョンシー跳びでやって来たので、I、J、Tはくすくす笑い、鼻をつまむ。Tは鼻から手を放し、やられたというように倒れる。

記録9 5歳児

片付けをしている時、男児Sはキョンシー跳びをしている。Sは観察者の視線に気付くと、今度は“あうー”と言ってカンフーの真似をする。そのうち転んでしまい、自分で自分を笑う。

記録10 5歳児

奥 田 倫 子

男児Yはキョンシーのように両手を前に伸ばして、その場でくるくる回る。それを見ている周りの子どもたちはおもしろがっている。

記録7から10まで記されているものは、おばけやキョンシーなどの超自然的なものを真似することである。キョンシーは死人の蘇りであり、あの独特の行進スタイルは、子どもたちに強烈な印象を与えている。今も昔も手を前にぶらり出して“おばけだぞー”と驚かすスタイルが子どもたちに楽しまれているが、キョンシースタイルは、現在の子どもたちにおもしろがられているおばけのスタイルであるように思われる。その他、鼻をつまむことやお札を額に張りつけるなどの様々なルールが、キョンシーやキョンシーごっこを魅力的なものとしているようである。おばけの真似をすることは、恐怖心と背中合わせになった、おもしろさが潜んでいるのではないだろうか。

その他、記録8や9で見られるように、大人の真似をすることもおもしろさの原因として考えられるようである。また記録10においては、同じキョンシーの真似をしても、くるくる回るような普通とは異なった動作を入れると、意外性によるおもしろさを引き出しているように思われる。

記録11 3歳児

立って歌を歌う時、男児Kが足をどたばたさせ、男児F、Iはその真似をする。先生はF、I、Kと手をつなぎ、前に連れてくる。そして先生と一緒に他の子どもたちと向かい合わせになって、歌を歌うことになる。3人は大きな声でどなって歌う。

このような足をどたばたする、手をぶらぶらする、体を横にゆらゆら揺らすなどの行為は、筆者の限られた観察の中では、子どもたちが退屈さを感じている時によく見受けられるようであった。しかし記録11においては、回りの人をおもしろがらせることを目的とした、ふざけの行為のように思われた。

記録12 4歳児

楽器あそびの時、男児Rはタンブリンを帽子のようにかぶる。

記録13 3歳児

男児Yは、首を激しく左右に振りながらタンブリンをならす。それを見て、そばにいた男児Uは、体をくねらせながらタンブリンをならす。2人とも、笑いながらである。

これらは、楽器は演奏するもの、あるいはこのように演奏するものといった概念に反したおどけ行為である。

記録14 5歳児

男児Tは、男児Rの髪の毛の一部がはねているのを見て、“Rちゃん、髪はねているね”と言い、自分の髪を片手でくしゃくしゃにして、“こんなにすればなおる”と笑いながら言う。

記録14はおどけに含めてよいかどうか迷った記録であるが、自分の髪をくしゃくしゃにすることは、自分で自分を笑いものにすることによって、相手を救おうとする、思いやりも潜んでいるのではないだろうか。

2. いたずら

人間や動物は、もともと環境を探索したい要求を持っている。初めて出会うものに対し探索しつつ、一つ一の物事の間係を学んでいるのである。このような行動は、無意図的ないたずらと表されるようだが、それに対し意図的ないたずらは、相手の困る状態を見て喜ぶものであり、快感情を伴うものである⁴⁶。

子どもは成長していく中で、何が大人に許され、あるいは禁じられているのかがわかるようになる、わざと禁じられたことを行い、大人の出方を確かめる遊びをするようになる。その証拠として、赤ん坊は、“だめ”と言われるものに接近し、母親が近づくのを待ち、いったん母親が気付くと、わざと全速力で目的物ところへ行き、止められるのを喜ぶこと⁴⁷、あるいは赤ん坊は両親が見ていなければ、禁止されたものにめったに近づかないこと⁴⁸が示されている。さらにこのような行為は、赤ん坊が母親を自分の方へひきつけるために用いられるという⁴⁹。

やまだ⁵⁰は「いやいやゲーム」と称して、相手の注意をひきつけるために禁止を犯すことを分析している。やまだは「いやいやゲーム」を「行く」と「来る」の2面性から考察し、「ボール遊び」や「いないいないバア」のように、相手と対面し、行き来を楽しむゲームと比較して、わざと逆方向へ「行く」ことによって、相手を自分の方へ「来させる」ゲームであると論じている。それは、相手の出方によって、自分の行動を自由自在に変える変化に富むものであり、相手との間にふざけであることがわかりあえて、初めて成立するという。

記録15 4歳児

男児Fは、高い禁止されたところに登り、笑っている。

記録16 5歳児

玉入れごっこの場面で、男児Sが積み木を台にして上に乗り、玉を投げている。先生は“ほら、そんなのだめ、危ない” “ちょっと待ってSちゃん、積み木の上に乗ると思切りジャンプできないでしょう” など言うが、男児Yもまた、別の積み木の上でやり始める。先生は当惑した表情であるが、子どもたちはくすくす笑っている。

子どもが挑戦意欲をかきたてられることは、時には大人の側の安全面での配慮から、禁止されることがある。これらは禁止されることを行い、面白がっている例であるが、記録16の場合、積み木の上に載って玉を投げること自体、子どもたちにとって目新しく、おもしろさを引き出しているようである。

記録17 5歳児

玉入れごっこをしている男児TとMが何やらこそこそ話をしている様子である。Tは“これ（かご）に全部（玉を）入れて、先生を驚かそうじゃないか” と言い、TとMは、玉を集めて全部かごの中に入れる。Tは“よし、これを先生に渡してこよう” と言い、TとMはにんまり笑う。二人は先生に近づいて“先生、これ全部入った” と言う。先生は“玉入れしてこれだけ入れた？ 本当？” と笑いながら聞き返し、回りの子どもたちも、みんなくすくす笑う。

記録18 3歳児

奥 田 倫 子

男児Uと女児Jは片付けの時に、くすくす笑いながら積み重ねてある積み木の隙間におもちゃの車を隠し、積み木でふたをする。

記録19 4歳児

男児Sと女児Oはくすくす笑いながら、本立てを支えるくぎを抜き取ろうとしている。

記録20 3歳児

男児Yはくすくす笑いながら、並べてある椅子の中で男児Tの椅子を見つけて、保育室の片隅まで運び、置いておく。Tは怒って“だめ、だめ”と言い、自分の椅子を元に戻す。

記録21 4歳児

砂場で女児U、N、Sが作った砂山を、男児Yは何度も足を出して崩す真似をする。崩そうとする度に、女児3人は笑いながら“あーっ”と言う。

記録22 4歳児

男児Kはサランラップの芯を女児Aに差し出し、“欲しい？”と尋ねる。Aが“うん”とそれを受け取ろうすると、Kはそれを引っ込めてしまい、Aは取ることができず、K、A共に笑う。Kは芯を2つつなぎ、できたもので自分の頭をたたき、“いてえ”と笑いながら言う。その後Kは、空箱のマシンガンで男児T、女児A、Hを撃つ真似をする。それに対して、Tは“あれー”と言い、こけたような恰好をする。A、HもTの真似をしておなじような恰好をしたので、Kは“おかしいね”と笑う。

記録23 5歳児

男児Rはござをくるくる巻き、ござの片側を持って運ぼうとした時、女児Fが反対側を持とうとしたので、Rは自分の方にござをぐいと引く。Fがござをつかめなかったので、Rは喜ぶ。

記録24 5歳児

積み木でできた囲いの中に座っている男児A、Jを、男児M、N、Sはくすくす笑いながら、閉じ込める相談をする。“でたい時、言えや”と言い、積み木を次々に載せて、最後には屋根となる板をかぶせる。Iが“ほら、出させない”と言ったので、中にいるAとJは閉じ込められたことがわかり、中で食器をガンガンならす。男児M、N、Sはにんまり笑って傍で見ている。Mは屋根の上に載り、AとJはそれがわかると、中で立ち上がって屋根を持ち上げようとする。Mは不安定な状態になり、笑う。とうとう屋根が取れてしまい、Mが積み木の中に落ちてしまい、見ていた子どもたちはあははと笑う。そして、次々に“次、ぼくの番”と言い、中に閉じ込められたがる。

これらは全て、相手を驚かせよう、あるいは困らせようとする、いたずら心から生まれたものである。記録20のように、相手が怒りを覚えるものもあるが、殆どは相手も共におもしろさを感じているようである。記録24においては、そのいたずらがおもしろく、自分もやって欲しいと望む子どもたちがたくさん出てくるまでになる。いずれをとっても言えるのは、そのような行為がどのような事態を生み出すか予測しているのであり、相手の反応を期待し、おもしろがっているのである。

記録25 5歳児

女兒I、J、Oは保育室で追い駆けっこをしている。途中で女兒WとUが加わるが、Uは、だれも自分を追い駆けてこないで、不安な様子である。何度も鬼の方に近づいて、自分の存在を知らせようとしている。そのうち鬼がUを追い駆け始めたので、Uは笑いを見せる。Uは捕まって、今度は鬼となり追い駆ける。I、J、O、Wは、“はい” “ニーハオ” “お鬼さんこちら、手のなる方へ” とはやしたてながら逃げる。

記録26 5歳児

男児Kと女兒Rは追い駆けっこをしている。RがKに追いつきKをたたいた時、Kは“あーっ”と言うが、笑い顔を浮かべ、今度はKがRを追い駆ける。

先程述べた「いやいやゲーム」の論理を用いると、幼児期に頻繁にみられる追い駆けっこを説明できそうである。追い駆けっこでは、追われる側は、追う側に近づいたりあるいははやしたてたりしながら、本来なら逃げるべき方向と逆方向へ「行く」ことによって、相手が追い駆けてくるのを誘うことがある。記録25では、Uが追い駆けられないために、つまらなさを感じており、いかにして追い駆けられるかと、追う側に近づいている。この相手を誘い出すような行動は、明らかにこれが遊びであることを両者が了解しているからこそ生まれるのである。さらに追い駆けっこでは、追う側と追われる側の立場が時々逆転することがある。記録26がその例である。

記録27 3歳児

男児Dは、女兒Uがどこに行くにも後についてくる。DもUもおもしろがっている様子で、二人とも笑っている。そのうちに、二人とも持っていたぬいぐるみでたたきあい始める。

相手の後をついて歩くことは、相手の真似をし続けること同様、子どもたちにとっておもしろいようである。もし付きまといわれる側が不快感を感じているのなら、それはおそらく長続きしないであろう。

3. 不一致を引き起こすこと

対象とその背後に規定されている概念との間に不一致があると、おかしさが生まれる。

記録28 4歳児

女兒UとKは、自分たちの描いた絵について話をしている。“男の子なのに髪がある？” “足ながーい”とお互いの絵について言い、笑っている。それを後ろからのぞきこんでいた男児RとYは、描かれた絵について“おもしろい顔”と言う。

記録29 4歳児

男児Jは笑いながら、遊びに使っているスカートを頭にかぶったり、はいたりしている。

記録30 4歳児

玉入れごっこで、男児Uは“よっこらしょ”とおじいさんのように言い、玉を投げる。それがおもしろかったのか、男児R、T、Yは、Uの真似をして玉を投げる。

奥 田 倫 子

記録28、29は、性差に対する概念の不一致によっておかしさを生み出された事例であり、それぞれの性のステレオタイプに反する出来事は、性差を認識し始めた子どもたちにとって、おかしいものである。また記録30は、おじいさんが玉入れをするというありふれた世界と掛け離れたイメージが、おもしろさを生み出すのであろう。

記録31 5歳児

積み木が3つ重なってテーブルのようになっている。女児Rが1番上の積み木を、中華テーブルのようにくるくる回すと、男児Eは“どうなってんの”と言う。Rは、小さな三角形の積み木を金槌のように使って、積み木のテーブルの上をたたき始め、“直ったよ”と笑いながら言う。それを見ていた回りの子どもたちも、あははと笑う。

記録32 3歳児

みんなで行進している時、男児A、M、Oは、わざと後ろ向きに歩く。

記録33 3歳児

U字型になるように、椅子を並べている時、男児Uは自分の椅子を男児Oの椅子の前に置いて、笑っている。

記録34 5歳児

男児Aは、まな板を食べる真似をして、“おいしかったぞ”と言ってそれを上に放り投げる。その様子を男児Iは笑って見ている。

記録35 3歳児

男児Hは“うまいなあ”と言いながら、ままごとの箸、フォーク、皿を食べる真似をする。見ている男児Jもくすくす笑っている。

記録36 3歳児

男児Yは、ダンスに使う帽子を箱の中から取り出し、その帽子のボタンが取れていたのを見て笑う。その後笑いながら、箱の中に頭をつっこんで帽子をかぶったり、お面のように帽子を顔の手前にかぶったりする。それを見ている男児T、Aもくすくす笑う。

記録37 3歳児

ままごと遊びをしている男児Kは、野菜の入っているかごを自分の頭上でひっくり返し、笑う。Kはさらに男児Hと共に、ままごとの食器棚の中身を引きずりだし、あたりをめちゃめちゃにする。そしてKは先生に“先生、これ見ろ”と言うと、先生は状況を見てにっこり笑い返したので、その反応を見てほっとしたのか、K、Hは微笑みを浮かべる。

記録38 4、5歳児

フォークダンスをし終わった後に、もう一度その曲がかかったので、半分近くの子どもたちがずっこける。

記録39 4歳児

女児SとYとは、サランラップの筒に黄色いセロハンをはりつけて作った望遠鏡のようなもので、互いを覗きあい、けらけら笑う。

これらは常識をくつがえすことによって生み出されたおもしろさである。記録32、33、37のようなクラスでの常識や期待に反することも、時として子どもたちはやってみたいのである。記録31では小さな三角の積み木が釘も使わず金づち代わりとなって、積み木を固定させること、記録34や35ではおままごとの道具を食べることが、ナンセンスであることを知っているからこそ、子どもたちにとっておもしろいのであろう。記録38に記してあるように、フォークダンスをし終わった後に再び曲がかかることは、子どもたちの予測とは異なったことであり、その意外性がずっこけを生み出している。記録39においては、友達の顔を望遠鏡で眺めてみること自体、おもしろいものである。それに付け加えて、いつも見慣れた世界が、黄色がかった世界へと変化することが、驚きやおもしろさを生み出すのであろう。

4. 排泄や性に関する行動

記録40 5歳児

椅子に座り隣りあわせになっている男児RとKは互いの性器に触りあう。それを見ていた男児Nがやってきて、触り合いに加わる。Rは椅子から離れて逃げたので、KとNはRを追い駆けて、捕まえて触ろうとする。

記録41 3歳児

女児Jがネル地のボールを股の間にはさんで、“おしっこ”と女児Oに言い、おもしろがっている様子。Oはタオルを股に挟んで“先生、しっぽ生えた”と嬉しそうに言う。

言葉によるユーモアのところで既に述べたが、排泄や体の隠された部分に関するふざけは、排泄に対する不安感を解消することや、あるいは回りの人にショックや驚きを与えることを目的としている。さらに、性差に気付き始めた幼児期では、男女の体の違いも興味の対象となるのであろう。記録40で記されている性器の触りあい、おしり、胸の触りあいや、スカートめくりと共に、幼児期より既に見られる行為である。

5. 行動によるからかい

記録42 4歳児

男児Aはカメラのようなものを、空箱、サランラップの筒、セロハンで作るが、女児Sがそれを“へんなの”と言ったので、AはSに組みかかりそうになる。Sは“やめて”と言って、そこに置いてあった筒で“コンコンコン”と言いながらAの頭をたたく。Aは黙っているが、Sを追い駆ける真似をする。それに対してSはふふふと笑う。

記録43 5歳児

男児Aは観察者のところにやってきて、“ちょっとしゃがんでみせて”と言う。観察者がその通りにすると、観察者の頭の上で“まじでくるくるばあ”と言いながらやってみせ、男児JやNと共にアハハと笑う。

記録42においては、女児Sの言葉（この場合、からかいではなく正直な感想とも思えるが）

奥 田 倫 子

や筒でたたくような行為によってAが、記録43においては、男児Aのくるくるぱあをする言葉や行為によって観察者が傷ついているように思われるが、本気ではなく、遊びでからかっていることを認識すると、受け取り手の反応は変わってくるのではないかと思う。上記の行為をからかいの本来の目的であるように、相手を傷つけることを目的としたものであると言ってよいかどうか、はっきりしていない。

その他、子どものユーモアに見られる特徴として驚きによるものがある。予測していなかった、驚くべきことが起こった時、多くの場合には笑いが表出される。

記録44 3歳児

片付けの時、男児Yは先生にこっそり忍び寄り、“わあ”と驚かす。先生は振り向いて、にっこり笑う。

これは、人を驚かすことによって、共に楽しさを味わおうとしている行為であるように思われる。

記録45 5歳児

男児Rは“こうやって跳べばいいんや”と言い、1メートル20センチ位の高さの積み木の上から、その下で男児N,Oが持っているゴムを跳び越そうとする。しかしOは跳び越せず積み木から落ちてしまい、体を強く打つ。それを見ていた回りの子どもたちはくすくす笑う。

記録46 5歳児

直方体の積み木の上に長い板状の積み木を載せ、すべり台のようにして遊んでいる。男児Mがすべった時に板が落ちてしまい、見ている子どもたちがくすくす笑う。Mは笑いながら、すべる順番を待っている男児Hが載っている積み木を、どんどんと足で蹴る。それに対しHは“だめ”と怒る。

記録47 3歳児

男児Jは、Bブロックの入っているかごを頭にかぶる。それを見ている男児Nは“壊れるよ”と言う。とうとうJのかぶっているかごが下に落ち、JとNが共に作った列車の上にぶつかり、列車は崩れてしまう。JとNはその様子を見て、笑う。

記録48 3歳児

沢山積み上げた積み木の上に乗っていた男児IとMは、積み木のバランスが崩れたため、落ちてしまう。Iは“僕のせいじゃないね”としきりに自分を弁解しようとする。横で積み木が落ちたのを見ていた男児Eは、くすくす笑っている。

これらは、突然起こった出来事であり、その意外性がおもしろさを生み出しているように思われる。記録45と46はそれに付け加えて「優越の笑い」、すなわち相手の失策や失敗や災難や欠点などにより相手の価値が低められた時に生まれる笑いも含まれているように思われる。しかしこのような笑いは、ユーモアと捉えることができるのか疑問である。さらに、驚きが驚きを受ける側の許容量を越えた場合は、恐怖や不安となることが考えられる。

む す び

最後に、子どものユーモアの中でも、今回研究対象となった乳幼児期のユーモアを中心に筆者なりにこれまでのことをまとめて考察してみたい。

前回ユーモアと子どもの発達とは大きく関わりを持っていることを、文献研究により述べたが、今回観察記録を通して、それが明らかになったように思われる。乳幼児の発達あるいは発達特性と照らし合わせながら、乳幼児のユーモアの芽生え、原因、意味について考えてみたい。

1. まず第一に、認識論者が示しているように、形成されたばかりの概念に矛盾した出来事をおもしろく思ったり、そのような出来事を生み出すことが観察記録の中に見出すことができた。子どもたちが成長する中で、獲得していった現実や常識や真実の世界に矛盾する出来事は、子どもたちにとっておもしろいようである。子どもたちは、時には自ら、現実や常識や真実をひっくり返したり、矛盾を引き起こしたりすることによって、それらが本当であることを確かめることもある。子ども時代の初期に要求されている、莫大な知識を習識するためには、内在しているイメージに新しい外界からの情報を関連づけることが必要なのである。

またユーモアの芽生えのところですでに述べたが、乳児は不一致を知覚しているかどうかについては見解が異なり、それによってユーモアの芽生える時期が定まってくるようである。今後乳児の観察を通して、筆者なりの立場をはっきりさせていくことを課題としている。

2. 次に言えることは、社会性の発達と共に、友達とおもしろさをわかちあおうとする行動が見受けられるということである。集団生活に入るようになると、友達と関わりを持って遊ぶことの楽しさを経験するようになる。回りの人と関わりを持とうとする中で、共におもしろさを味わおうとする行動も増えてくる。筆者や学生の記録の殆どは、他児や教師との関わりの中で生まれたユーモアであり、ユーモアを生み出す側と受け取る側との間に、何らかの反応あるいはやりとりが生じているのである。時には、受け取り側が不快感を覚えるものもあるが、それは生み出す側が、相手にそのような感情を与えることを予期できていなかったのであり、もし意図的に相手を傷つけるような、からかいで代表されるようなものなら、ユーモアに含めることはできないと筆者は考える。ユーモアを生み出す側と受け取る側との関係は微妙であり、双方とも、それが遊びであることを了解せずには、あるいは遊びへと心の状態が移り変わらぬ限りは、ユーモアとして成り立たない^(ように)思われるのである。いたずらがからかいとは異なるのは、いたずらをする側が、相手を傷つけるのを目的としているのではなく、相手を驚かせたりおもしろがらせたりすることによって、その相手の反応を楽しみたいという気持ちがあるからである。

3. 幼児期には、体をたえず動かしていることが多く、運動量が多いことで特徴づけられる。幼児は循環器の機能がまだ弱いこと、いわゆる心臓が体の大きさに対して小さいこと、血管が細く体を循環する血液の量が少ないことのゆえに、体をたえまなく動かしていることが必要なのである⁵⁾。それ以外にも、幼児の身体的機能は、知的機能や感情的機能と切り離して考えられ

奥 田 倫 子

ない程、密接に関わっていることから、考えたことや感じたことを、直接に行動に表す傾向があるように思われる。そのことから、子どものユーモアにおどけた恰好をする、追い掛けっこをするなどの、大人にはそれ程みられない身体を使った、動きの多いユーモアが見られることが納得できる。

4. 子どもが成長する中で、模倣や見立ては非常に重要な要因であり、それらが子どものユーモアの特徴となっている。模倣はコミュニケーションの手段とも考えられていることから、笑いや微笑みが模倣に付随して生じることは説明できるようだが、おかしさと結びつきははっきりしない。見立てやふりで知られる子どもの象徴的行為は、心内である対象物に異なったイメージをもたらすことで、おかしさを生み出すことがある。これはまた、対象を様々な角度で捉えることができる拡散的思考力であり、ユーモアと創造性との結びつきを考える上で重要である。

5. 性に関すること、排泄に関することは、幼児期においておもしろさの材料となっている。それらがどうして生じるのかについては、前者は、性差が獲得されることにより、性に対する関心が高まることを理由として、後者は、排泄をまだコントロールしきれない不安感を解放することを理由として文中で述べた。精神分析学者らはこれらのことを、性的な欲望を社会的に認められる形で表されたものとして捉えている⁵²が、果たして幼児期においても、そのように理由づけすることができるのか疑問である。

6. 子どもは幼ければ幼い程、興味がある対象や活動には取り組もうとするが、そうでないものに対しては、退屈さを覚え、気が散りやすい傾向があるように思われる。記録で示されたユーモアのいくつかは、退屈さを紛らわそうと気分転換しているものであり、足をどたばたさせたり、友達におもしろい顔をして見せているなど、子どもなりの対処の仕方が見られるようである。

以上6つの点について、乳幼児のユーモアの芽生え、原因、意味を、発達や発達の特性との関わりの中でまとめてみた。ここで問題となってくるのは、不一致、模倣、見立てなどがそれ自体ユーモアとなるかどうかということである。特に不一致においては、ユーモアを捉える重要な要素としてこれまで考えてきたが、果たしてそれだけで、おかしさを生み出すかどうかは疑問である。

McGhee⁵³が述べているように、playfulness がその場にはない限りは、言い換えると深刻な心の状態においては、ユーモアは生まれにくいように思われる。playfulness は、子ども時代において顕著に見られるように思われるが、次第に社会的制約を受けるようになってくると、相手の出方に左右されるなどして、自分を思いのままに表現することが難しくなってくる。学生の捉えたユーモアの箇所で述べたように、子どものユーモアが自然なものであるのは、playfulness な状態が根底にあるからではないだろうか。今後 playfulness をさらに分析し、子どものユーモアを成り立たせる条件を筆者なりに整理していきたいと考えている。

註 及 び 参 考 文 献

1. 奥田倫子「子供のユーモアに関する研究（その1）」『北陸学院短期大学紀要』第19号、1987、83-97 参照.
2. やまだようこ『ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち1—』新曜社、1987 参照.
3. Klein, A. J. Children's humor: A cognitive-developmental perspective. **Current topics in early childhood education**, 7, (ERIC ED 265 937)、1-43.
4. D. H. コーエン& M. ルドルフ・森上史郎訳『幼児教育の基礎理論 上巻 幼児理解とクラスの経営』教育出版、1984 参照.
5. 稲田和子「わたしのマザーグース—幼児のことばの実際—」『山陽学園短期大学研究論集』第11号、1980、25.
6. 吉岡たすく『ゆかいな子どもたち、吉岡たすく続著作選集第3巻』雷鳥社、1981、268.
7. R. A. スピッツ 「基礎教育—発達モデルとしての対象関係—」 J. ピアジェほか著、赤塚徳郎、森林訳『遊びと発達の心理学』黎明書房、1987、52.
8. 黒田実郎監修『乳幼児発達事典』岩崎学術出版社、1985.
9. J. ボウルビィ・黒田実郎ほか訳『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎学術出版社、1977 参照.
10. 吉田弘道「乳児の微笑とひとみしり—微笑の発達とはたらきを中心に—」『新しい子ども学 第1巻 育つ』小林 登ほか編、海鳴社、1985 参照.
11. J. ピアジェ・谷村 覚、浜田寿美男訳『知能の誕生』ミネルヴァ書房、1978 参照.
12. 黒田実郎監修 前掲書.
13. C. ガーヴェイ・高橋たまき訳『「ごっこ」の構造—子どもの遊びの世界— 育ちゆく子どもシリーズ = 6』サイエンス社、1981 参照.
14. 吉田弘道 前掲書 193.
15. 黒田実郎監修 前掲書.
16. 例えば堀尾輝久ほか『岩波の子育てブック幼年期1. 子どもを見る目』岩崎書店、1986 参照.
17. 例えば吉田弘道 前掲書 参照.
18. C. ガーヴェイ 前掲書 参照.
19. 友定啓子「2歳児の「笑い」」『日本保育学会 第40回大会研究論文集』1987、154-155.
20. 織田正吉『笑いとうもろ』筑摩書房、1979 参照.
21. 寺内定夫『ほほえみと大空のおもちゃ』国土社、1985 参照.
22. Hass, H. **The human animal**. New York: Delta, 1970 as cited by Pollio, H. R. et al. The development of laughing and smiling in nursery school children. **Child Development**, 1984, 55, 1946-1957.
23. Clarke-Stewart, A. et al. **Child development; A total approach**. New York: John Wiley & Sons, 1985.
24. e.g. ibid.
25. Srofe, L. A. & Wunsch, J. P., The development of laughter in the first year of life. **Child Development**, 1972, 43, 1326-1344.
26. McGhee, P. E. **Humor: Its origin and development**. San Francisco: W. H. Freeman and Company, 1979.
27. 友定啓子 前掲書 参照.
28. やまだようこ 前掲書 参照.
29. C. ガーヴェイ 前掲書 参照.
30. やまだようこ 前掲書 参照.
31. 寺内定夫 前掲書 参照.
32. D. ローゼンブルース・繁多 進、新倉涼子訳『タビストック 子どもの発達と心理 0歳』あすなろ

奥 田 倫 子

書房、1984 参照.

33. K. I. チュコフスキー・樹下 節訳『2歳から5歳まで』理論社、1970 参照.
34. 同上書.
35. 同上書.
36. McGhee, P. E., op. cit.
37. C. ガーヴェイ 前掲書 参照.
38. K. I. チュコフスキー 前掲書 参照.
39. D. H. コーエン & M. ルドルフ 前掲書 参照.
40. T. B. ブラゼルトン・森上史郎訳『ブラゼルトンの1、2歳児をどう育てるかー自立期のころと育児ー』医歯薬出版株式会社、1983 参照.
41. Krogh, S. He who laughs first: The importance of humor to young children. **Early Child Development and Care**, 1985, **20**, 287-299 参照.
42. 本田和子『異文化としての子ども』紀伊國屋書店、1987、34.
43. S. H. フレイバーク・託摩武俊、高辻玲子共訳『魔術の年齢ー幼児期の心の発達ー』金子書房、1979 参照.
44. 友定啓子「現象学的保育研究ー「きたない」をめぐるー」『保育現象の文化論的展開 人間現象としての保育研究ー3』本田和子ほか編、光生館、1977 参照.
45. 新村 出編『広辞苑 第三版』岩波書店 1983.
46. 内山喜久雄監修『児童臨床心理学事典』岩崎学術出版社、1974 参照.
47. E. キエスターほか・小林 隆ほか訳：ベビーブック、太平社、1988 参照.
48. T. B. ブラゼルトン・平井信義監訳『ブラゼルトンの赤ちゃんの個性と育児ー発達の現れ方のちがいー』医歯薬出版株式会社、1983 参照.
49. 同上書.
50. やまだようこ 前掲書 参照.
51. 西久保禮造『幼児理解の心理学』教育出版、1981 参照.
52. 例えばS. フロイド・懸田克躬ほか訳『機知ーその無意識との関係 フロイト著作集 第4巻』人文書院、1980 参照.
53. McGhee, P. E., op. cit.